

人間科学部・人間科学研究科

| | | | |
|----|-------|-------|--------|
| I | 研究水準 | | 研究 2-2 |
| II | 質の向上度 | | 研究 2-3 |

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、平成 18 年度の状況ではあるが、研究論文数は 132 件であり、学会での発表数は 109 件になり、増加傾向にある。学際的・分野横断的な人間科学研究の探求については、部局内で重点配分経費を設定し、複数の研究分野が連携する体制を作っている。研究推進基盤の充実については、研究科の 4 室体制の整備強化を図っている。研究資金の獲得状況については、平成 19 年度の科学研究費補助金の採択数（採択金額）は、48 件（1 億 205 万円）であり、このほか、いくつかの産学官研究資金を獲得している。また、「魅力ある大学院教育」イニシアティブ、文部科学省大学院教育改革支援プログラム、グローバル COE プログラムを獲得している。研究の連携状況については、ボランティア人間科学講座と国際シンポジウムの開催に力を注いでいるなど、優れた成果がある。

以上の点について、人間科学部・人間科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、人間科学部・人間科学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、神経科学一般、実験心理学、統計科学、ジ

エンダー、西洋史、経済学説・経済思想、社会学、人類学の分野において先端的な研究成果が生み出されている。卓越した研究成果としては、例えば、味覚記憶の脳機能の解析、味の嗜好性における脳内神経伝達物質の役割の研究は国際的に高い評価を受けている。社会、経済、文化面では、社会学、社会心理学、教育学で優れた研究が行われている。例えば、職場でのセクシュアル・ハラスメント、自然災害に対する防災活動、親からの学校へのクレームの問題の研究は、社会に対する優れた貢献として高く評価できる。これらの状況などは、優れた成果である。

以上の点について、人間科学部・人間科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、人間科学部・人間科学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が 4 件、「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が 1 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。